

八章 退院

イタリアの病院でよかったことも、もちろんないわけではない。病室は2人部屋で、シャワー室とトイレがついていた。手術の翌日でも、下半身が流せるのはひどく嬉しかった。じきに洗面台で髪も洗った。不思議なことに、イタリアの病院では携帯電話OKである。禁止の札は見たことがない。おしゃべり好きなイタリア人はメールをあまりせず、よく家族や友人相手に携帯でベッドでしゃべっている。

それから、食事。昼食と夕食がいつも同じボリュームで、プリモ（副菜）、セコンド（主菜）、野菜、デザートとそれぞれ3~5種類の中から前日に選べる。2週間もいればひととおりは食べたような気がするし、みんな薄味で、美味に慣れたイタリア人は肉を「材木みたいやね」「味ないわねえ」とくさす。野菜はサラダでなければヨーロッパの常とて、例外なく「グッチョンチョン」に柔らかく、煮過ぎて風味も失せている。フランス人のマルティンが言っていたが、「歯ごたえのある」野菜炒めというのは、ヨーロッパでは「生煮え」なのだそう。

しかし感心したのは、厚めの皿がかなり温められているうえにぴっちりとした蓋つきで、熱い料理はいつもほんとに熱かったことである。わたしには珍しかったせいか、味も何も満足だった。少なくとも、日本では公立私立合わせて5軒入院しているが、そのうちの4軒よりはずいぶんマシだった。

これが、国民保険ではなく民間保険利用の、日本で言う特別室ばかりの階だと、専門のコックがいて料理がレストラン（レストラン）級、らしい。物好きにも覗（のぞ）きに行った患者が、エレベーターを出たとたん「犬でも追いかうように追い返された」とニヤリと笑って言っていたが、万事ケタ違いに豪華だ、という噂である。

わたしはこっちで充分で、病室ではなく食事室でみんなと食べるのも、気分転換とおしゃべりによかった。イタリア人は開放的で、外国人のわたしが疎外

感を感じたことはない。日本人が閉鎖的といわれるのがよくわかる。しかしどの病院でも食事室があるわけではなさそうだった。

夕食のとき、神父がワインを片手に回ってくる。昔アガサ・クリスティの推理小説で、キリスト教の聖職者はカラー（衿開き）が後ろ向き、と書いてあったが、確かにそのとおりの服だった。一言話し、祈り、みんなでアーメンを言って乾杯すると、ミサの時間を告げて去る。

わたしはこのカトリックの総本山の国にしながら、まだ教会の礼拝（ミサ）に行ったことがなかった。信者でないからだし、また多くの教会でも礼拝の時間は観光客を入れない。見世物ではないのだ。ねえ、暇つぶしに行ってみようよ、とマリアンジェラを誘うと、いいけど、暇つぶし、っていうのはないわよ、とたしなめられた。

教会は9階にあった。さすがに街中の教会ほどではないが、天井が高く、そこここに木を使った、なかなか立派なつくりで、病院にこんな施設があることはいいことだと思った。死期を前にざんげもできるだろうし、悟りが開けないひとは神に救いを求めたくもなる。ひとり静かに祈りもできる。

何せがん病院である。

死は、少なくとも死の観念は、あまり遠くない。

カトリックの国だとはいえ、日本人の機能一点張りでは出てこない発想ではないか。そういえば、以前行った近所の総合病院にも礼拝堂があった。

礼拝そのものは神父の言葉があまり聞き取れず、立ったり座ったりで、へえ、というくらいだったが、この神父はアコーディオンも弾く。左手で和音のボタンを操るタイプの楽器で、土曜の夕方など、廊下の片隅のソファのあるあたりから、映画音楽か古い流行歌かが流れてくる。音を聞きつけて入院患者がひとり、ふたりと増え、即興のペアを組んで抱き合って踊りだすのまでいる。一度は上の階から降りてきた男性が、ちょっと貸せ、と神父から楽器をとりあげ、2、3曲得意げに弾いてみせた。

教会ばかりではなく、この病院には地下に劇場まであるのに驚いた。このあ

たりはさすが音楽の国イタリアである。200人はゆうに入るだろう。木曜の晩ボランティアで喜劇をやるという手づくりのポスターが10日ほど前から食事室の扉に貼ってあるので、行こうよ、と声をかけ、何人かで行った。点滴の台をひきずったガウン姿の観客に、家族か看護師か、普通の服のひとも混じる。役者は確かに素人の集まりでそれなりのできだったが、観客はけっこう笑い、湿っぽく退屈な入院生活の中でいい気晴らしになった。

別の夜にはベネツィアから来たという合唱団のコンサートもあった。喜劇に比べて哀れなほど観客が少なく、舞台の上の合唱団の人数とそれほど違わなかった。日本だとクラシックファンは全人口のざっと1パーセントだという。イタリアではさすがにそれよりは多いだろうが、やはりポップスのほうが人気があるらしい。わたしの耳には声も歌も悪くなく、コンサートのあとロビーで合唱団とともに出されたワインが術後とあって飲めないのが残念だったが、満ち足りた気分で病室に帰った。

話し相手専門のボランティアのおばちゃんも回ってきた。わたしは特に必要を感じなかったが、内科などで長く入院すると退屈するし、人生の終わりを意識すれば、愚痴や弱音、後悔に思い出話も含めて、話したいことが多いひとにいるだろう。

入院一番の「当り」だったのは、同室のロセツラだろう。大柄で、眉が太く目が大きく、人柄はしごく落ち着いて、イタリア人の常でいつも薄化粧していた。日本ではほんとの顔色がわからないから、入院患者の化粧は普通禁じられているのよ、と言うと、へええ、なるほどねえ、効率と正確さを重んじる国らしいわね、(でもそこまでしなくても)という顔をしていた。

ロセツラは、イタリア全土を長靴に見立てたらつま先にあたるカラブリア州から、はるばる800キロかけてミラノまで手術のために来ていた。このがんセンターはそのくらい国民の信頼を受けている。造園をやっているという無口な大男の旦那もミラノの親戚の家に泊まり、毎日来ていた。

病室に腰を据えた日に、テレビは？とロセツラが聞くので、あなたが持って

来なければならないわよ、とわたしが以前言われたとおりに言うと、口をあぐり開けてあきれていたが、たちまち親戚の家から持ってきた。

ロセツラはものすごく親切だった。南イタリアのひとは北イタリアのひとを冷たいと言う、と聞いていたけれど、ロセツラとその家族と知り合ってどういふことかよくわかった。とても温かい。わたしと知り合ったばかりだというのに、十年來の友だちのようにロセツラから発される好意の波が強く、自然なものとして感じられる。他人への壁、というものを感じさせない。

手術の夜、わたしは自分 1 人では起き上がれなかった。右胸から腋（わき）へと切られたあとが痛くて痛くて、からだをねじるのも曲げるのもままならなかったのである。立ってトイレに行きたいが、その夜の男性看護師はおそろしく不親切で怠惰で威張っているヤツで、呼べども呼べども来ない。見かねたロセツラが上手に手を貸してすっとわたしを起き上がらせ、立ち上がらせて、部屋の隅のトイレまで連れて行ってくれ、わたしが用を足すあいだ、点滴のスタンドがじゃまして戸が閉まらないのを、向こうを向いて手で支えてくれていた。恥ずかしかったが、背に腹は変えられず、好意に甘えた。

あまりにわたしの手助けが上手なのに驚くと、いつもやっているから、とサラリと言う。次男のアンジェロに生まれつき心身の障害があり、小さいころは障害を克服するための体操を習いにスイスまで親子で泊りがけで行っていたし、車椅子生活の今でも、車椅子の乗り降りから学校の宿題まで全面的に手伝ってやるらしい。しかしロセツラは事實は言うが、愚痴は言わない。負担だとか耐え難いといった感じはかけらもなかった。まさに献身的な母親だった。

旦那がまた誠実な様子で、ロセツラがわたしより 2 日遅れて手術に行ったときなど、檻の中の熊よろしく巨体で無言のまま狭い病室の中を歩きつめるか、じっと座って聖書を読むかである。心配と、神への祈りが、からだ中から発散されている。ベッドで横になっているわたしが気詰まりなほどだった。

「ロセツラが手術の晩はわたしが手助けするね」と約束していたのだが、旦那が食事はスプーンで食べさせるし、本人もひとりで起き上がる。手術自体が軽く、全摘でもないしリンパも取らなかった、という違いもあったらしいが、

わたしが手を貸す必要はまるでなかった。

退院してからも手紙のやり取りがあったのが嬉しい。

退院は術後 1 週間ほどたってから、と聞いていたら、わたしは少し遅れた。リンパ節を取り出した腋の下はごっそりとえぐれているし、右の乳房をまるまる取り除き、再建にそなえて直径 15 センチほどの生理食塩水入りの円形の袋を代わりに入れたので、切って縫ったあとは直線に過ぎなくても、その両側の皮をはいで中をいじったところはかなりの面積にのぼる。それが全部問題なくくっつかなければならないので、いくら内臓に関係ないとはいっても、やはり小さな手術とは言えないだろう。

傷の長さは 20 センチほどだが、その下のわき腹に穴を 2 カ所開け、膿（うみ）を出すためのチューブがそれぞれ入れてある。日本で言うドレンチューブだ。チューブは 1 メートルほどの長さで、蛇腹型のプラスチック容器まで続いている。ベッドにいるときはこの容器を床に置くが、歩き回るときは、ボランティアが縫ってくれたという長い紐のついた布の袋を肩から下げる。わたしは紫色を選んだ。

毎日看護師が容器の中の液を出し、測る。最初血が混じって赤っぽいのが、しだいに透明な薄黄色になる。この液の量が両方とも 100 cc 以下にならないと退院できない。しかし手術の翌々日が 320 と 120、1 週間後でも 110 に 60。わたしよりあとに手術したマリアンジェラが先に退院していくのが羨ましく、恨めしい。計測が、いいかげんなイタリア人のやることで、容器をよく絞るひとも、さっさと終わるひともいるので、あまり正確ではない。

手術の次の日にはリハビリが始まった。強制ではないから、熱があるひとや興味のないひとは来ない。時間を決めて何人かが集まり、おじいちゃん先生の言うとおりに輪になったりボールを使ったりして簡単な体操をする。

リハビリといえば、日本で手術をすとかしないとかもめて半日入院したとき、隣のベッドのもう手術をすませた初老の女性が、「腕がここまで上がるようになるまでは退院できないと言われて、リハビリをがんばっているのだけれど、

なかなか痛くてできないんですよ」と嘆いていたから、これは気をつけねば、と思っていたのだが、やってみると、1年前肩を脱臼したあとでかなりやったリハビリとよく似ている。

中年以降で脱臼すると、ひとにもよるのかもしれないが、あとでまるで肩が動かなくなる。痛くてかなわない。リハビリに行ったほうがいいわよ、と友人から忠告されたが、どこへ行けばいいのかわからず、しばらくほうっていた。一度国民保険のきかない医者に行って診察のためだけに1万5千円も払い、それ以上法外な金は出せないとしリハビリは諦めていたら、子どものサッカークラブの仲間の親が、懇切丁寧に教えてくれた。

このジョヴァンナは母親ながら、男どもに混じってクラブの世話役を買って出るくらいの積極的で親切なひとで、わたしが国際クラブ以外で最初に名前を覚えたイタリア人でもある。とは言っても外国名前はよく忘れるので、わたしはジョーヴァネ（若い）ジョヴァンナ、と覚えることにした。名前なんだっつけ、という時に、「若い」を思い出せばあとが出てくるのである。本人に言ったら、そうよ、若いのよ、アハハ、と喜んでいた。

「あのね、マドカ、まずあなたの『かかりつけ医』に行っておね、リハビリが要るっていう指示書もらうのよ。それからガルバニャーテ・ミラネーゼの総合病院に行く。整形ならガルバニャーテが一番だからね。行ったらロビーに自動券売機があるから、1回700円の10枚綴りを買う。で、受付に行くの。空いている時間の中であなたの好きな時に予約とってくれる。毎日、1カ月やるのよ。絶対治るから」

毎日1時間は少々面倒だった。しかし、作業療法士は親切な女性で、わたしを横たわらせておいて、自分が手を貸してわたしの腕をいくつかの方向に押し上げる動きを何度もやったあとは、棒や布を使った簡単な体操をわたしにやらせた。すると、こわばっていた肩の関節が行くほどにほぐれるのがわかった。リハビリのコツもひとつ習得した。必ずゆっくり。急な動きはダメ。ゆっくり何度もやる。痛くなる場所の寸前まで動かして、やめる。無理はしない。慣れ

たらそこで初めて、少し痛くなる場所まで動かす。そして、毎日続ける。

連日行くうちに、他の療法士や患者と顔見知りになった。ある日「中国人か？」と聞かれて、「違う、日本人よ」と答えた。定番の受け答えである。イタリアでは初めから日本人かと聞かれることのほうが珍しい。中国人のほうが圧倒的に数が多いのだ。日本料理店よりは中華料理店のほうがはるかに多いし値段も安く、わたしが中華街を歩くと、中国語で話しかけられるくらいである。

すると、「なんで日本人は中国人を嫌うんだ？」と聞かれた。面食らいながら、「別に嫌いじゃないわよ」と答え、ただね、と付け加えた。

そのとたん、おやと思うほど静かになった。部屋中のイタリア人がわたしの答えに耳を澄ましているのを感じる。普通のイタリア人にとって、外国人の生の声を聞く機会はやはり少ないのだ。

「通りで家族連れとすれ違うでしょ。すると子どもが、ほら、チネーゼ（中国人）だ、チネーゼだ、て言う、あれはイヤね」

「そりゃそうだ」「あたりまえだなあ」と口々に声があがった。「俺らだってイタリア人だ。それをフランス人とかドイツ人だとか言われたらイヤだもんなあ、違うって言うぜ」

こういう反応はまだいいほうで、日本は中国の一部だとか、大陸の一部だとか思っているイタリア人もたくさんいる。年齢に無関係で、地理は習っていないのか、と言いたくなるが、何年か前にユーゴスラビアが内戦に陥ったとき、その位置を初めて知った日本人も多いはずだと思えば、いずれも同じ、ということか。

さて、ドレンチューブから出る液の量が術後 8 日目にやっと 70 と 50 cc に減った。あくる金曜日はまた 100 と 70 に戻ったが、週末ではあり、まあよからうと退院することになった。

嬉しい。

これからは家で毎日計り、3 日後の月曜日にまた病院に来いという。病院は街中にあるので、郊外のわが家から通うには、車だと早朝で 40 分、遅く出ると

渋滞で2時間かかる。そうでなければ1時間と少しかけて車、地下鉄、バスと乗り継がなければいけない。それでも家のほうがいい。

5月に入り、庭の赤い薔薇の隣には、名はわからないが可憐（かれん）な白い花と、薄紫のライラックが咲く。メルロが鳴く。この真っ黒い鳥は、春から夏まで半年近くよく歌う。それも、ことばではとても言い表せないが美しいメロディで、「鳴く」のではなく「歌う」という表現がぴったりである。日本の鳥にもホーホケキョだとか、チョットコイだとか、ツキヒホシ（月日星）なんとかだとか長く囀（さえず）るのはいるけれども、こんなに音楽的なのは聞いた覚えがない。オペラで世界的に有名な国にふさわしい鳥というべきか。声も豊かなアルトである。

見ていると、夕暮れ時にあっちのアンテナ、こっちの樹のてっぺんといった高みで、雄どうしが鳴き交わしている。まるで会話をしているようだと言おうが、たぶん現実には、「ここは俺の縄張りだぞ、入ってくるなよ〜」「そうかわかった、こっちはぼくの縄張りだからな、こっちにも入ってくるんじゃないぞ〜」という意味だろう。朝は暁と同時に、この歌声で目を覚ます。夢見心地に鳥の歌を聞いているのは天国である。わたしはこのメルロの歌が、イタリアに来て一番好きなもののひとつなのだ。

暗くて憂鬱（ゆううつ）な秋と違い、春は太陽の光がきらめく。イタリアの5月は1年中で一番きれいな季節である。ところが、16日ぶりに家に帰り、ひさびさの畳に布団で眠り、昼はメルロの唄を聞きながら居間から庭を見て、ああ他人のいない空間とほいものだ、と一息ついていると、だるい。

微熱がとれない。

手術後だからあたりまえだよ、ゆっくりしてなさい、と夫はわたしの入院中と変わらず洗濯などしてくれる。

欧米の会社では、社員が残業せず定時に帰ることが圧倒的に多い。夫は朝8時前に家を出て車を20分運転して会社に着き、夕方6時前後には帰ってくる。そんな余裕のある暮らしだから家事もできるのであって、これが日本だとまず平日に夫の手伝いは期待できない。イタリアで手術できてよかったのである。

まったく、会社員がちゃんと働いたあと、自分のための時間がたっぷりあることがこんなに「豊か」なことかと、イタリアにいると心底思う。その点日本はいくら金があっても「貧しい」と言わざるを得ない。

微熱は1週間ほど続いたあとで平熱に戻り、ドレンチューブも退院3日後と9日後に抜き取られた。チューブを引き抜くときにムチャクチャ痛い。体内の余分な液を取るため、穴がたくさん開いたチューブが10センチ以上体内に入っていたので、からだの内側がそのあたり全部、一瞬とはいえこすられたのだ。家で消毒し、しばらくして穴はふさがった。

腋（わき）の下がえぐれている。しょうがあるまい。触ると骨がわかるのはリンパ節を取ったせいだろうが、皮膚の感覚がない。何かが触れているという感覚も、痛みもない。妙な感じである。無感覚なのは背中に近い部分から、わき腹にいたるまでかなりな広範囲にわたる。反対に、二の腕の内側は、ちょっと何かが触っても飛び上がるほど痛い。おろし金ですられているような、けがをして赤剥（む）けの皮膚を触られたような、鋭い痛みである。腕など手術でいじってはいないのに。

通院の際聞いてみると、無感覚という皮膚の異常は残念ながら完全に治ることはない、とのことであった。しかし腕の痛みはそのうちなくなるそう。夫に聞くと、一度切れた神経がつながる速度は、他の筋肉や皮膚の回復に比べて非常にゆっくりなのだという。デリケートで複雑な組織ということか。

再建にそなえ、乳房を取ったあとで入れた袋に、2週間ごとに注射で生理食塩水を足してふくらませ、胸の皮膚を伸ばしていく。100cc足されると、皮膚が張って痛い。出産後に赤子が乳を十分に吸ってくれないと、できた乳で乳房がパンパンに張って痛いことがあったが、それと同じ痛みだった。苦情を言い、その次は60ccにしてもらった。ロセツラは痛み止めをもらったと言っていた。巨乳のイタリア人ならかなりの量と回数、食塩水を足さないといけなだろう。

大病院への通院でとまどったのは、待合室から診察室に入るときに、椅子と鏡と鍵がついた1畳ほどの「脱衣室」があいだにあって、そこで診察に不要な服を脱ぐことだった。たいてい診察室1つにつき脱衣室が2つあり、前の患者

を医者が診ているあいだに次の患者が脱いで待っているのです、どうも医者の待つ無駄な時間が少ないようである。初めは「脱衣室」というイタリア語がわからず服を脱がずにいたら、看護師さんが教えてくれた。

お乳を診てもらう場合は上半身裸で診察室に入る。ちょっと恥ずかしい。これが婦人科になると下半身裸で部屋に入るのです、恥ずかしいを通り越してかなり居心地が悪い。が、そういうものらしい。婦人科で診てもらったとき、下半身むき出しのまま、超音波の画面などを見ながら医者と話ることがあった。なんというか開き直ったら別に平気で、日本の、開脚台の上で医者とのあいだにカーテンがあるのよりは、よほどわたしは好きである。恥ずかしさはあるけれども、わたしのからだはわたしのもので、医者に悪いところを診てもらうのもあたりまえ、ならばそれについてその場で話すのもあたりまえだから。

手術後、摘出したリンパ腺にがんが転移していなかったかどうか検査してわかるまで3週間かかる。幸い、転移はなかった。夫はおそろしくほっとしたらしい。再発率、生存率ともに、リンパに転移があるかどうかで、お話にならないくらい違うからである。転移がなければ再発率は1割以下、当然長生きもかなり多いが、転移があれば5年生存率（非再発率）は半分を切る。実際、あとのことだが、わたしの「戦友」も1年以内に2人死んだ。

わたしは乳房を温存したかったのです、化学療法を手術より先にやっている。そのおかげで、リンパにすでに転移していたがんが消えた、という可能性もあるのではないかと夫に聞くと、そりゃそうかもしれないね、と答えた。

夫が、安心したよ、転移してなくて、と友人のジャンフランコに告げたときには、そうだってね、よかったねえ、と彼はもうその事実を知っていた。ジャンは夫のいる製薬会社の研究所でも臨床、つまり新薬が実際患者にどう効くかどうか試す、という部門におり、したがって病院と関係が深いようで、いつもわたしの治療法にしても成果にしてもわたしより先に実に詳しく知っていて、夫に説明してくれたらしい。わたしの担当医についても、病院でナンバー2のベテランだから安心していい、とか院長と話をしたよ、とか語っていたような。

夫は、よく気を使ってくれていた、とたいそう感謝をしていた。

しかし、日本人と違うところは、ジャンは夫が尋ねなければ告げないところで、決して押しつけをしない。夫はそのほうがいい、気が楽だ、と言っていた。

ジャンは元々会社の副社長をしていたのだが、両親が年老いたので海外勤務を拒否して一時干され、その後降格を受け入れたという、それでも会社では上のほうにいる60歳近い人物である。欧米だと、仕事を離れたら上役でもヘイコラする関係にはない。友人は友人で対等である。夫もわたしと同様、この手の上下関係の少ないヨーロッパの風土が、えらく気に入っていた。

このジャンフランコ、イタリア人には珍しく非常にシニカルな雰囲気をもった皮肉屋で、初めてわたしに会ったときには呆気（あっけ）にとられた表情だった。妻のダーリーンやわたしの夫からわたしのことは聞いていたはずだが、どうもわたしがもっと美人でおしゃれだと（勝手に）想像していて、実際のわたしがブスで垢ぬけない「芋（いも）」なのに驚いたのではないか、という感じだった。わたしの夫は男前である（とわたしは信じている）が、それにひきかえ自分の見栄えが悪いことくらい、わたしは承知している。ジャンの驚愕ぶりは単純におかしかった。それに、彼は「イメージと違う！」という様子は露骨に表していたが、「何だこのブスは」と軽蔑する感じはまるでないところに好感が持てた。

わたしが肩を脱臼して右腕を吊ったまま立食パーティに出たとき、ジャンは「それじゃ食べられないだろう」と食べものを口に運んでくれた。夫でさえそこまでわたしにしてくれたことはなかったのに。イタリア男は基本的にどんな女にも優しい。わたしは当然辞退しまくったのだが彼はものともせず、ほら、口を開けて、と強引にフォークを突き出すから、ま、いいか、と食べさせてもらった。サラダを一皿食べ終わるころ、ふと離れたところにいる夫を見ると、ぽかんと口をあけてこっちを見ている。おかしいやら可哀そうやらでわたしは爆笑してしまった。

化学療法中にも、奥さんの夕食の差し入れについて来たとき、長身のジャンフランコは「おう、マドカ！ 具合はどうか？ よさそうじゃないか！」と叫ん

で、わたしを抱きしめ、持ち上げた。この辺は色男として世界に名高いイタリア男である。ハゲ頭に帽子をかぶったわたしはキャットと言って笑いながら、でも気分は悪くない。色気はかけらもない。奥さんの目の前である。わたしの亭主の目の前でもある。ふたりともニコニコして見ている。

奥さんのダーリーンは一時夫の会社で英語の先生をしていた。ある日廊下で夫と出会い、「あら、元気？」とチュッ、チュッと両頬にキスしあったのはいつもどおりなのだが、その日夫の後ろには、日本から来た同僚がふたりいた。

ダーリーンは派手な美人である。

「誰だ、今の？」

「ん？ 女房の友だちだよ」

「なんでだ?? ただの女房の友だちとチュッするか？」と彼らが怪しがったのは想像に難（かた）くない。

この、友人と出会ったときと別れるときに、「抱きあう、ほっぺにキスをする」というのはイタリアでは普通だが、日本人のわたしが慣れるのには時間がかかった。

相手が女だとまだいい。わたしがニコニコして片言のイタリア語で話していると、すぐに親近感を持ってもらえたらしく、初対面の老婦人にギュッ、チュッとやられたのは、イタリアに本格的に住み始める前に、家の下見に行つて帰るときだった。逃げる間も固まる間もなく引つかまれて頬にキスされた。

はあ、へえ、ほっぺたと言えど女にキスされたのは初めてだわ、こういうことをこっちのひとはいつもやってるわけね、はあ、それにしてもばあ様のほっぺと言うのは柔らかいもんだわ、というのが初体験の印象だった。

見ていると、女性陣は他人の亭主にもかまわず、ギュッ、チュッとやっているが、わたしにはとてもできない。亭主にぼやくと、「あれは握手かキスかは女性に選択権があるんだよ、男性じゃないよ」と言う。そういえばわたしは男性陣とは常に握手だったが、それは積極的に手を出さないでいるわたしに向かって、いつも男性のほうが片手を差し出していたからだった。しかしフランス人

と結婚している日本女性はいつも帰り際に自分から男性に両腕を広げている。もっとも抱き合うといっても、普通はお互いの二の腕に掌をかけるくらいで、抱擁というにはほど遠いし、キスもほんとは唇が頬に触れるとは限らない。音だけというのも多い。

住み始めて1年半後だった。子どもの中学校のスポーツイベントが夕方まで続き、先生や親がハンバーガーなどの屋台も出す。ワインを多少飲んで帰り際、一番仲のよかった、夫の直接の上司でもあるクリスの髭面（ひげづら）にチュッ、チュッとやったあとで、

「結婚以来、亭主以外の男のほっぺたにキスしたのはあんたが初めてよ」と言ったら、クリスはたまげた。

「えっ、初めてだって!? ほんとかい？」

「ほんとよ。日本じゃこんなことしないもの。ふだんからひとに触る習慣ないし、ほっぺにキスなんてお母さんが赤ちゃんにするか、恋人どうしくらいで、友だちは普通しないわ。家族のあいだでもしない。ましてや他人の亭主のほっぺなんてとんでもない。こっちじゃみんなやってるでしょ、でもわたしにはずっとできなかった。イタリアに来て1年半かかったってわけよ」

「へーえ！」

よほど驚いたとみえて、彼はその後3年たっても覚えていた。

この、抱きしめる、という行為。

慣れると、いい。

イタリア男のイヴァンも、奥さんのスウェーデン人のカリーと自宅でのクリスマスパーティにわたしたちを呼んでくれたとき、「ああ、マドカ、マドカ、元氣そうじゃないか。よく来てくれたよ」と玄関でオーバーの上からハゲ頭のわたしを長々と抱きしめた。ああ、気にかけてくれていたのだな、としみじみ嬉しい。

そしてがんにかかったと告げたとき、治療中に出会ったとき、何人もの女友だちが、わたしをギュウウッと抱きしめてくれた。イギリス人のアン、イタリ

ア人のジョヴァンナ、南アフリカ共和国人のトニー、インドネシア人のラニー。
今でも忘れられない。骨組みの大きな、上背のある白人女性に抱きすくめられ
ると、安心感がある。いやらしさなど欠片（かけら）もない。

からだの温もりが伝わってきて、心も温もる。

すごく。

ことばでは表されない、同情、心配、友情、好意、応援、いろいろなものが伝
わってくる。

心の弱っているときに、あんないいものはない。

わたしはいろんなトラブルにもかかわらず、がんの治療を日本でなくイタリ
アでしてつくづくよかったと思っているが、理由のひとつはこの「ギュウウ」
である。